

□書 評□

「大腸の癌・ポリープの X線診断と病理」

丸山 雅一 癌研究会付属病院内科

社会保険中央総合病院
大腸肛門病センター部長

隅越 幸男

本誌「胃と腸」は表題に胃が大文字で、腸が小文字で書かれている。これは察するに、わが国の消化管の疾患の頻度からこのような表現となったのであろう。

しかし、食生活を主とする日常生活、習慣の変化にともない、欧米なみに大腸疾患の種類、頻度が増加しやがて上部、下部消化管疾患のバランスが逆転して「胃と腸」となる時期がくるかもしれない。すでに、その傾向はここ10年来徐々にあらわれてきている。

ところで、早期胃癌の発見の技術がゆきつくところまで行った今日、多くの研究者はどっと早期大腸癌の発見にその精力を集中しだした。大腸ファイバースコープに関する進歩もめざましい。

しかし、大腸疾患の診断には、X

線検査、内視鏡検査そして生検が同時に必要であることは異論がない。

本書は大腸癌、ポリープのX線診断に関して、著者の数多くの専門的経験から、その前処置、造影剤、各種造影法およびそれらの歴史、また診断における検査法の選択、造影法の技術について、懇切丁寧に述べられている。特に素晴らしいのは、大腸ポリープ、大腸癌の数多くの、眼をみはるような鮮明なX線写真の連続である。われわれ、日常いかによい写真をとるかに苦慮しているものにとっては、誠に羨ましいくらいの鮮明さである。これはひとえに、著者のX線診断に対する限りない努力、根性、そして執念の作品とも言え、全く敬服に値する。そして、何よりも理解をたすけるものは、X線写真と同時に切除標本およびその二重造

影、組織像が対比して並べられていることである。

大腸疾患を専攻するものにとっては何論、とくに早期大腸癌発見に取りくんでいるものにとって、誠にすばらしい著書ができたものである。座右の書として、もろ手を挙げて推薦したい。

それにつけても、ジャイロスコープの威力をまざまざと見せつけられた。欲するあらゆる角度から随時、撮影可能なジャイロスコープは、大腸微細病変の発見には必要欠くべからざる新兵器であるといえよう。

こまかい話であるが、さらに日常大腸X線撮影にあたっての前処置などは、画一的な方法がとられがちだが、実際にあたって、具体的な細かい配慮がなされている。食事の内容についても患者の食生活の習慣、排便の状態を十分考慮して、適切な指導をするなど全く同感であり、よい写真をとるには、いかに前処置に十分気をくばるかが大切な点である。

著者は大腸X線診断学の若手のホープと聞く。今後益々業績を重ね、次代をリードしてゆくことを期待する。

A 4 頁 202 図 24 写真 367
¥ 10,000 円 280
医学書院刊